慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評：戦後70年以降の原爆をめぐる社会学の可能性： 松尾浩一郎・ 根本雅也・ 小倉康嗣編著『原爆をまなざす人びと： 広島平和記念公園八月六日のビジュアル・ エスノグラフィ』新曜社、2018年
Sub Title	
Author	木村, 豊(Kimura, Yutaka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.206- 209
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0206

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：戦後 70 年以降の原爆をめぐる社会学の可能性

松尾浩一郎・根本雅也・小倉康嗣編著『原爆をまなざす人びと
――広島平和記念公園八月六日のビジュアル・エスノグラフィ』
新曜社、2018 年

木村　豊

8 月 6 日の深夜、広島の平和記念公園では、ある「感動的な光景」（p.iii）を見ることができる。そこでは「若者たちが自転車や徒歩でひっそりと原爆慰霊碑を訪れ、誰に言われるのでもなく祈りをあげ、立ち去っていく」という光景が毎年繰り広げられているのであるが（p.16）、そのような光景を目撃した社会学者がそのときに感じた「熱い気持ち」（p.iii）を社会調査という道具を用いて社会学的に表現したのが、本稿で取り上げる『原爆をまなざす人びと』である。

１．８月６日深夜の平和記念公園の光景

2012 年 8 月 6 日深夜、評者は本書の編者である松尾氏・小倉氏らとともに平和記念公園内でその光景を眺めていた。ある若者は自転車に乗ったまま公園内に入ってきたかと思うと、原爆慰霊碑のすぐ近くに自転車をとめて、碑に向かって静かに祈りを捧げ、また自転車に乗って去っていった。それは数分間の出来事であったが、とても印象的なものであった。ただ、評者は、そのような原爆をめぐる若者達の立ち振る舞いを目撃し、何とも言えぬ思いを抱きながらも、それを上手く言語化することが出来なかった。それでも、松尾氏と小倉氏は、その後も毎年 8 月 6 日に平和記念公園を訪れ、そこで見られる光景を言い表すための言葉を探していった。

そうした中で、広島に原爆が投下されてからちょうど 70 年となる 2015 年 8 月 6 日の平和記念公園に集まる人びとに焦点をあてた共同研究が進められていった。そこでは、8 月 6 日の丸一日、酷暑の平和記念公園を 12 人の調査員がビデオカメラをもって歩き回り、そこで見られる光景を映像で記録していくというビジュアル調査が行われ、81 時間にもおよぶ膨大な映像が撮影されることとなった。そのような共同研究の成果がとりまとめられた本書の「原爆をまなざす人びと」というタイトルは、そのきっかけとなった 8 月 6 日の深夜に原爆慰霊碑を訪れる若者達を端的に言い表した言葉であるとともに、共同研究全体を貫く枠組みともなっている。

そのようにして編まれた本書の全体の構成を概観すると、次のようなものとなっている。

まず第１部では、〈原爆をまなざす人びと〉をまなざす研究全体の枠組みと（１章）、複数の調査員がビデオカメラをもって同じ空間内で映像を撮影する調査の在り方（２章）が提示されている。それから第２部では、あるひとりの調査員の経験と（３章）、調査を通して「観察されたもの」を社会学的に表現した「社会調査映画」（４章）、アメリカ映画関係界隈におけるその

木村豊「書評：松尾浩一郎・根本雅也・小倉康嗣編著『原爆をまなざす人びと――広島平和記念公園八月六日のビジュアル・エスノグラフィ』」
『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）206-209 頁

「映画」の受容のされ方（５章）、調査映像の空間性を芸術的に表現したインスタレーション作品（６章）、各調査員が撮影した映像の特徴（７章）が記述分析されている。そして第３部では、広島の市街地と平和記念公園を結ぶ元安橋の映像と（８章）、平和を象徴する原爆ドームと慰霊を象徴する原爆供養塔の映像（９章）、8 月 6 日の深夜に原爆慰霊碑を訪れる人びとへのインタビュー（10 章）が記述分析されている。また、全体を通して 8 つのコラムが収められている。

それらはそれぞれ興味深い論稿となっているが、本稿では紙幅の関係で各章について詳しく取り上げることが出来ないため、以下では本書全体に対する所感を述べていきたい。

２．戦後７０年と原爆をめぐる主体の移り変わり

戦後原爆をめぐる数多くの社会学的な調査研究が行われてきたが（浜・有末・竹村編 2013）、そこでは戦後の各年代において異なる原爆と社会の関係が描き出されてきた。そうした中でも特に、戦後 50 年以降は、「戦争の記憶」研究の大きな盛り上がりに呼応するように、社会学の中でも原爆が記憶という言葉と強く結びつけられて論じられてきた。そこでは、原爆の記憶をいかに語り継ぐ／継承することができるのかという社会的な課題が設定されたうえで、原爆の記憶が被爆者によっていかに語られているのか、そして、戦争を経験していない世代の人びとはそうして語られる原爆の記憶をいかに受けとめているのかという問いが模索されてきた。

戦後 70 年以降、そうした原爆の論じ方はまた大きく変わりつつあるように思われるが、本書はそのような流れを先取りするように、原爆をめぐる社会学的な研究の新たなフェーズを切り拓くものとなっている。とりわけ、「原爆をまなざす人びと」というタイトルは、そうした本書の立場を端的に表すものとなっており、それは何より原爆をめぐる主体の移り変わりを言い表していると言える。つまりそれは、原爆を直接経験した人びとではなく、戦争を経験していない世代の人びとが主体となり [1]、さらにはそうした人びとが受動的に原爆の記憶を受けとめるのではなく、能動的に原爆に関するものへと向かっていくことを言い表した言葉となっている。

そのようにして原爆の非体験世代に注目する本書は、同じく原爆の非体験世代である筆者自身がいかに原爆をまなざすことができるのかという課題を意識的に内包するものともなっている。つまり、「私たちは原爆を知らない」（p.i）という言葉から始まる本書は、原爆についての新しい知識を提供するものとなっていないだけでなく、原爆をまなざす非体験世代の人びとを客観的に観察するものともなっていない。そこでは、筆者自身の非体験世代としての当事者性を立ち上げることで、原爆をめぐる客観的な知を相対化するようにして、非体験世代の「私たち」はいかに原爆について考えることができるのかについて問い直す試みがなされている。

３．社会調査と映像作品――調査者のまなざしの追体験

また、原爆の非体験世代によって書かれた本書は、同じく原爆の非体験世代である読者に対しても、「主体的に関与することを期待する」（p.15）ものとなっているが、その「期待」は特に、本書を購入すると視聴することができる６本の映像作品の中に込められている。それらの

映像作品の中では、平和記念公園で「原爆をまなざす人びと」を淡々と描き出すような表現方法をとることで、「原爆をまなざす人びと」をまなざした調査者の視線がそのまま再現されている。そうすることによってそれは、原爆からちょうど 70 年となる 2015 年 8 月 6 日の平和記念公園を歩くという調査の経験を読者が追体験することを「期待」するものとなっている。

その際、映像作品に映し出される「原爆をまなざす人びと」に向けられた調査者のまなざしは、決して調査者のあいだで統制されたものではない。ダグラス・ハーパーが指摘するように、ビジュアル調査は、同じ社会的世界を撮影しようとしても、撮影者の社会的な立場（個人史・年齢・性別など）の違いによって異なる方法で異なる写真や映像が撮られることとなる（Harper 2012: 4）。そのため、映像作品の中では、さまざまな「原爆をまなざす人びと」に対して各調査者によって異なるまなざしが向けられており、それを見た読者は、そうしたさまざまな「原爆をまなざす人びと」に向けられたいくつもの異なるまなざしを追体験することとなる。

そのようにして調査の経験を読者へと開こうとする本書は、筆者と読者のあいだの対話を促進するものともなっている。つまり、そうした映像作品は、「原爆をまなざす人びと」をまなざした調査の経験を追体験させることを通して、読者に対して、「8 月 6 日の平和記念公園における人びとの〈まなざし〉に触れて…あなたは何を感じ、考えるだろうか」（p.16-17）と問いかけるとともに、それに対する反応を「期待」するものともなっている。そうすることで本書は、本文中でも映像作品に対する視聴者からの反応が取り上げられているように、筆者と読者のあいだの対話自体を調査のプロセスの中に取り込もうとするものとなっていると言える。

４．人びとに原爆をまなざさせるものとは何か？

一方で、人びとはいかに原爆をまなざしているのかについて考えようとする本書は、「いかに（How）」の問いを踏襲している点では、従来の「原爆の記憶」研究との連続性の上に成立していると言える。そのためそこでは、「なぜ（Why）」の問い、特に人びとはなぜ原爆をまなざしているのかについてはあまり積極的には検討されておらず、広島において非体験世代の人びとが原爆をまなざすことが自明のこととして捉えられているようにも見受けられる。そのような本書に対して本稿では、現代の社会学／社会調査の中で「なぜ」を問うことの難しさを承知したうえで、人びとに原爆をまなざさせるものとは何かという問いを投げかけてみたい。

というのも、本書に載せられている「原爆をまなざす人びと」へのインタビュー事例には、彼らに原爆をまなざさせている何かを垣間見ることができるように思われる。例えば、元安橋である東京出身の広島在住者は、なぜ 8 月 6 日に平和記念公園を訪れたのかという質問に対して、「足が出向いてね、っていう感じ」（p.177）と語っている。また、原爆慰霊碑前である広島出身の高校生は、自分が原爆とうまく向き合うことができていないことを「いいことではあんまりない」と思う理由を「失礼だから」（p.231）と語っている。そうして彼らが原爆をまなざす背後に見え隠れする何かについて考えることは、非体験世代の「私たち」がいかに原爆について考えることができるのかについて問い直すうえで重要な思索となるのではないだろうか。

またそうした問いは、筆者自身を原爆に関する研究へと向かわせたものとは何かという問いへとつながっていく。本共同研究では調査者個人が「自身の関心や好奇心に従って自由に撮影」したとされているが（p.42）、そこでは原爆をまなざす非体験世代の人びとをまなざす非体験世代の調査者自身の関心や好奇心がどのように生まれてきたのかということが再帰的に問われることともなると考えられる。そしてそれはさらに、そのようにして撮影された映像を調査者の個性（「恣意性」（p.27）もしくは「意図していない」のに映されたもの（p.69））を汲み取りながらどのように分析することができるのかといった問いへとつながっていくことで、非体験世代によって原爆に関する共同研究が行われたことの意味を問い直すものともなるだろう。

まなざすという行為は、まなざす主体とその対象とのあいだに一定の距離があったうえで、まなざす主体の意識がその対象へと向けられることによって成立する。だとすれば、本書の根幹にある、私たちはいかに原爆をまなざすことができるのかという問いは、戦後 70 年が過ぎ、戦争を経験していない世代の人びとにとって原爆が遠い過去のものとなりつつある今だからこそ立ち上がってきたものであると考えられる。そしてその問いは、とりわけ原爆という言葉を聞くと身構えてしまい、自分と原爆とのあいだに大きな距離を感じてしまうような戦争を経験していない世代の人びとにとって意味を持つものとなる。本書は、従来の原爆をめぐる知を相対化することでそうした人びとの意識を原爆へと向けさせるものであり、それは戦争を経験していない世代の人びとが原爆をまなざすためのひとつの契機となるものであると言えるだろう。

【註】

1) そうした本書の立場は、近年記憶研究の中で起きている新しい動向の中にも位置づけることができる。例えば、マリアン・ハーシュは、「ポストメモリー」という言葉を用いて、先行する世代の「個人的、集合的、文化的なトラウマ」を、後続する世代が「育った過程で、物語やイメージやふるまいの意味によってのみ『想起している』経験」として担っている関係を記述しようとしている（Hirsch 2012: 5）。

【文献】

浜日出夫・有末賢・竹村英樹編著、2013、『被爆者調査を読む―ヒロシマ・ナガサキの継承』慶應義塾大学出版会.

Harper, D., 2012, *Visual sociology*, Routledge.

Hirsch, M., 2012, *The generation of postmemory: writing and visual culture after the Holocaust,* Columbia University Press.

（きむら　ゆたか　筑波大学人文社会系研究員）